診療所集まって利益

各地に医療モール

複数の診療所が一か所に集まった「医療モール」が県内でも増え始めている。医師にとっては、賃貸形式のため個人診療所よりも低負担で開業できるのが大きな魅力。過重労働と言われる勤務医を敬遠する医師の受け皿としても注目されている。一方、勤務医側からは、モールの開業医にも休日・夜間の診察負担を求めるなど、問題を指摘する声も出ている。

医療モール　一般的に二つ以上の診療所と、調剤薬局が集積した施設の呼称。建設会社など第三者が企画し、医師が賃貸契約で入居するタイプが多い。診療所が集積することで地域住民の注目を集める効果もある。地元で認知されていない医師でも低負担での開業が可能になる。診療所は独立経営のため、会計は独立しているほか、診察時間は独自に決められている。医師の連携は薄い。

一昨年7月に開業した、国内最大規模の医療モール（さいたま市南区）

低コストで開業

■隣接

川口市の医療モール内に5年前、皮膚科医院を開業した山本恵美子さん(46)は「他の診療科が隣接し、患者が多く集まりやすい」とモールを選んだ。モール内には耳鼻咽喉科、内科、小児科、歯科などの診療所が集積。他の診療所を訪れた患者が、次の機会に皮膚科に立ち寄ることも多く、効果は表れているという。

開業する医師にとって、経費節減も大きな魅力だ。診療所新設には億単位の資金が必要と言われるが、医療モールなら6000万円前後で開業が可能で、初期投資を大幅に削減できる。

今年5月、朝霞市内のモールに開業した内科医の黒田直樹さん(47)は「個人で土地を調達し、診療所を建てていたらまだ開業できなかっただろう」と話す。

■盛況

さいたま市南区のJR武蔵浦和駅近くに、国内最大規模の医療モール「武蔵浦和メディカルセンター」が誕生したのは2年前。八つの診療所の診察科目は20を超え、ほかに三つの薬局などがある。1日平均600～700人の患者が訪れるなど盛況だ。

センター内の診療所は「病院と変わらない感覚で受け入れてもらっているようだ」と歓迎する。医療モールの正確な数は不明だが、県医師会は「ここ数年で次々と新設され、県内で少なくとも数十はある」という。

■警戒

開業医のコンサルタントをしている「ヘルスアップ」（さいたま市南区）の鈴木慎一営業企画部長は「埼玉は県南地域に国立大学の医学部がないことなどから、これまでは開業地として敬遠されていた。しかし、都心より割安感が強い不動産と人口密度の高さから、注目が集まっている。今後も医療モールは増えるのではないか」と話す。

とは言え、空き室を抱えるモールも目立つ。県内外に多数の眼科医院を展開する医療法人「新光会」（さいたま市南区）の新保光一郎理事長は「独立志向の優秀な医師を集められるかどうかがモールの重要なポイント。スカウトできる人脈がないと成功は難しい」と指摘する。

モールの増加は勤務医の流出につながるため、勤務医らの警戒も強い。県医師会の金井忠男副会長は「病院には医者が足りない。勤務医が入院患者を抱え、休日・夜間も診察し、過剰労働になっている。医療モールの開業医にも夜間診察などの負担を求めているが、非協力的な人も少なくない」と批判的だ。今後は、勤務医と開業医の負担調整も課題となりそうだ。